



TITLE:

<批評・紹介>蒙古學報 創刊號

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. <批評・紹介>蒙古學報 創刊號. 東洋史研究 1940, 5(5): 379-384

ISSUE DATE:

1940-09-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/145700>

RIGHT:

地方の石灰岩丘陵地域に散布する新石器時代或は初期金石併用期の剝片石器類に關する記述である。

本書は探險調査の報告書であつて、所謂研究書ではない。然し記する處その調査を通じて印度の初期人類並びに舊石器文化研究の上に、確たる基礎を提供した點で特筆せらるべきものがある。かの赭土が次第に南方に到る程新らしくなる事は洪積世に於けるこの地の氣候の移動を物語るものであり、更にカシューミールの第三紀終末に屬するシイワリツク (Swatki) 層序からは右のナルバダのファウナ類の源をなす熱帶的ファウナ類の他に、最も發達した猿類の遺骸を發見してゐる事實類の如きは人類最古の文化考究上にも又印度の石器時代研究にも重要な意味を持つものと思はれる。此の意味で、本書は單なる報告書たる以外に東洋學を修めるものに對し一つの意義を持つであらう。

〔藤岡謙二郎〕

蒙古學報 創刊號

財團法人善隣協會內蒙古研究所發行
四六倍判 二七八頁

善隣協會の中に蒙古研究所が設置された事はかなり前に報ぜられては居たが、その發表機關については何等我々は知る所はなかつた。今回新に創刊された「蒙古學報」はこの研究所の機

關雜誌として活動すべき任務を與へられたものである。昭和十三年十二月「蒙古學」第三冊が出たまゝ年四回發行の公言にもかゝはらず一向其後音沙汰なく、唯一の蒙古研究の雜誌も不幸なる運命に見舞はれたかの感を與へて居たが、「蒙古學報」はそれに代るものとして堂々たる四六倍判の體裁を以てこゝに出現することになった。簡単な趣意書のみで、研究所の内容、研究の狀態も明かでないものであるが廣く一般の蒙古研究者の投稿を容れるさうであるし、年四回の發行で進むと云ふ。時局的な觀念に捉はれずとも、我が國の蒙古研究は地理的歴史的に考へてもつと進むべきであり、決して外國に劣らぬ成果を擧げるべき時である。再び我々が唯一の學術的な蒙古研究發表機關を得た事は甚だ喜ばしい。發刊を祝すると共に研究員諸氏の努力により今後の發展を期待するものである。儀禮的乍らも内容を次に紹介して敬意を表する事にしよう。

「元代の訴訟裁判制度」(有高巖) 一個の社會がその秩序を保たうが爲に或る規範を提出する時、その規範は社會の要求性に從つて發生し其の社會の發展に應じて變遷する。このやうな社會と其の規範の一つの表現たる法制との表裏性と云ふか或は不可分離性とも云ふべきものに着目して法律制度の歴史的發展を檢討し、以て當時の社會の史的研究の一助たらしめると云ふ事は社會史研究の一つの方法として充分根據ある妥當なもの

と云つてよい。元代社會史に造詣深き有高博士は夙に此の點に着眼せられ「元代法律の特色」(歴史と地理三四ノ四五)以來諸種此の方面の勞作を世に問うて居られるが再び我々は此處に表記の研究を受け得たことを喜ばしく思ふ。論文の内容は元史、通制條格、元典章、吏學指南等を中心として法院の組織、訴訟の方法を詳細に述べられて居るが、特に唐制と比較して中央官廳の組織の變革、民事刑事裁判の區別、懸賞摘發の存在、原告被告なる言葉の初見、檢屍方式の整備、約會制等を明かにされたのは本論文に貴重な價值を與へるものと信ずる。後學者として批評の限りではないが讀後感を述べる事が許されるならば、前述の如き方法に立つならば、制度の改廢でもそれが起るからには相當の理由が存在し、それが若し社會狀態に對應するものとすれば現在研究されて居る限りの元代社會の特殊狀態よりそれを説明するか、或は逆に此の論文に明かにされた元代訴訟制度の特色より當時の社會狀態を説明するか、どちらかゞあつてよい筈であるが、注意しなければならぬ事は、假令必要上社會規範として成文法があるからと云つても直にそれが成文通り實際に行はれたと考へ難い事である。例へば博士が二十七頁に引用されてる「諸哈の大師、止令掌教念經、回回人應有刑名戶婚錢糧詞訟、並從有司問之。」(元史刑法志職制門上)は通制條格卷二九詞訟に「至大四年十月初四日中書省欽奉聖旨、哈的大

師每只教他每掌教念經者、回回人應有的刑名戶婚錢糧詞訟大小公事、哈的每休問者、教有司官依體例問者、外頭設立來的衙門并委付的人每革罷了者、麼道聖旨了也、欽此。」(元典章五三問事「哈的有司問」にも同文あり)とあるのと相應するものと考へられるが元史の本紀を見ただけでも同じやうな法令が仁宗紀一皇慶元年十二月、文宗紀一、致和元年八月の條にそれ〴〵見え、元末支那に遊んだ有名な Ibn Battuta の傳ふる所にも法官 Kadi と教長 Sein が廣東等を始めとする支那内地の回教徒居住地で同徒間の行政裁判等の特權を握つて居たことを云つて居り、合せ考へて元一代を通じてかゝる治外法權の撤廢は實行されなかつたと思はれるのである。故に博士の云はれる如く此の條文通りに「Kadi」にはたゞ宗教上の事のみを受持たしめ裁判事件は悉く普通の役人の所管に歸した(二十八頁)とは斷言出來ないやうに思はれるが如何なものであらうか。一つの場合として考へてみたいのである。尙元代刑政研究の史料として重要な憲纂通紀についても一言も及ばれて居ないのは些かさびしいものがある。

「ブリヤート方言の分類」(服部四郎、先づ一八五八年に出た Castren の遺稿に付せられた Schiefner の考へを先驅とし、續々と現れて來たブリヤート方言の分類を歴史的に Orlov, Rudnev, Vladimirtsov. 等について回顧し、ソビエトになつ

てから Poppe を首班とするブリヤート方言調査の機關が出来た。ブリヤート蒙古語の羅馬字化が正式にモスコで採決された事を言ひ、Burjat Mongolskoe Jazykoznanie 及び Bibliografija Mongolovednoj lingvističeskoj literatury za 1917—1932 goda に主として依つてその調査の詳細を述べて居られる。然して氏は Poppe の記述に就いて、氏のホロンバイル滞在中の研究を基礎として彼の誤謬並びに粗雑さを指摘せられるが特に次の點が注目を惹く。即ちセレンガ方言に就いて Poppe はそれをブリヤート方言とハルハ方言との境に立つては、移行的方言と創作らこれをブリヤート方言の中に入れて居る。が之は少くともブリヤート、ハルハと同じく肩を並べる第三の方言或は中間的移行方言として獨立せしむべきである。寧ろ服部氏の考へよりすれば此をハルハ方言の一つとしてブリヤート方言への移行的位置にあるものと見做すべきである。又新バルガ方言に就いてもブリヤート方言内の一小方言とせずハルハ方言と東ブリヤート方言の間の中間的第三方言と認むべきであると。然らば何故に Poppe がかゝる説をなしたか。服部氏は Poppe が政治的考慮に支配されて、セレンガ方言がブリヤート自治共和國內に行はれ乍らソビエト外の外蒙ハルハ語の一部とする事は面白くない。此の方言をブリヤート語の一部とする以上バルグブリヤート方言は當然ブリヤート語の一部としなければならぬ。此

もブリヤート語の中に入れると、滿洲國ホロンバイルに行はれる方言をも味方に引入れる事となり、政治的にも都合悪くないと云ふ考へを持つて居たのではないかと云はれてゐる。若干穿ち過ぎた感がないでもないが興味の深い觀察と云はねばならぬ。氏がホロンバイルでバルガ、アガのブリヤート方言を研究された蒙古語學界の權威であり此の氏の述考其のものが Poppe の説に對する批評であるからには蒙古語方言研究の専門でない我々は又屋上屋を重ねて批評する資格はない。論文と云はんよりは寧ろ専門的な徹底した批評である事を紹介するに止めたい。「王詔の熙河經略に就いて」(樓一雄)宋代の對外政策は以夷制夷の傳統的外交政策に終止して居る。例へば此處に西夏を對象として考へるならば契丹に對しては既に宋の操り得る所ではなく唯外國との連和を防ぐに汲々たる有様である。對回鶻對吐蕃の政策が問題となつてくるのは當然のことである。對吐蕃の政策に就いて公にされたものは今までに中島敏氏「西羌族をめぐる宋夏の抗爭」(歴史學研究第一卷)であり、其の後京大東洋史談話會で佐伯富氏が「王詔の開邊策」なる題で昭和十一年十一月十二日に講演された事がある。今中島氏の分類に従ふと宋の對吐蕃政策は、

前期 吐蕃驪慶時代

第一 夏羌交渉以前——宋太祖太宗時代

第二 夏羌抗爭時代——宋眞宗仁宗英宗時代

後期 熙河蘭鄯經營時代 宋神宗以後

と時代を分けて考へることが出来、中島氏は自ら前期第二期を中心とすると云ひつゝ王韶の熙河經略についても其の概觀を與へられて居る。馮氏は其の序説に於て中島氏の考察を新しい史料を補ひつゝ巧みにまとめられ、本論に於ては王韶が其の平戎策に於て西夏を討滅せんとすれば黄河湟水一帯の地を復する事が必要であり其の爲には西夏吐蕃兩者の間隙に突入して之を二分し青唐族の統一なきに乘じて各個別に之を招撫し西夏攻撃の重要な一翼を分擔せしめんとしたことを述べられて居る。當時は神宗皇帝位にあり、王安石亦堂にあつて此の政策を極力支援し、爲に王韶は具體的には秦州に市易司を設け西蕃と交易して利益を收め更に秦州より渭源方面に營田して縁邊經營の費用を捻出せんとした。彼は即ち蕃族と民間との交易を政府の手に收め自ら之を監督し秦州渭源間の開墾を奨励したのである。かうして前進據點は秦州より隴西へと進められ、洮河安撫司ついで熙河路と經營の發展が見られる事になる。本篇は此の間の經緯について詳細なる論述が行はれて居る。大體此の地方は地圖地志各様の記載があつて研究者を最も悩ます地方なるにかゝはらず、氏が及ぶ限りの地理書を一々檢索して文末に付せる地圖にまで纏め上げられた勞に對しては讃嘆の念を禁じ得ない。文

獻によるより外今は方法のない今日かゝる地圖が我々に與へられたことは感謝すべき事である。此の地名の精確な考證だけでも本論文は仲々の力作と考へる次第である。唯外國語の地名の音譯に就いて若干云はしてもらふならば氏の史料とせられる續資治通鑑長編の通行本は清朝以後永樂大典より復原せられたもので其の外國關係の名詞には相當改竄が加へられて居る。例へば氏が一一四頁に示せる如く宋史、東都事略、太平治迹統類等に乞神平堡とあるのが長編では策徽不勒とある。氏が策徽を乞神、不勒を平に當るとするのはそのまゝに措いても後者を西藏語の城壘を意味する *pho-bran* (brain とあるが誤植であらう) とするのは解しかねる事である。西藏語の發音は現代音はもとより古代音が屢々例示せられる如く *ajhabat* の如く發音されるものとしても *bra* は不勒或は平には甚だ遠いものである。まして不勒が信用出来ない長編の音譯であり、平を信用するとしてもその音は反て益々遠くなつて来る。又一二八頁に述べられてる如く、宗、臧、臧等を *rdzons* と見做すことも注意しなければならぬことで宗は兎も角として臧、臧が *rdzons* なる音にあてられる事は小生の狭い管見を以てしてはあり得ず、寧ろこの宗と臧、臧は別な音の表示なりと最初から考へておかねばならぬやうに思ふ。南撤宗とか木宗とかにしても、南が *bran* にあてられる事は種々出来るが、氏の云ふが如く木が一

字でよく *nam* の音に一致せしめられた事はその例がないのである。長編が南撤宗を納木薩勒宗と書いて居るのも氏の云ふが如く薩が衍字であつたのでなく、それが果して當つて居るかどうかは別として長編の編者が南撤を *nam gsal* とでも考へて納木薩勒と改譯したものではなからうか。唃廝囉の本名欺南陵温錢通にしても疑問は生ずる。複氏は錢通を *bsang-po* の訛として居られるが錢はおそらく現代音 *tsen* 古代音 *tsien* であるべく賛の古代音 *san* とは若干差を持つものである。錢通は *bsang-po* より、人名の語尾に多く用ひられる *bas-po* ではなからうかとの疑は充分存する。或は錢の韻は *en* であるから形容詞 *Chen-po* の訛譯ではないかとも疑はれる。唃廝囉が大になつた第一の理由は彼が賛普即ち王族の出身であると云ふことを述べてる史料は見當らないやうであるが、若し錢通を *bsang-po* の訛と考へる事にその一つの理由が置かれて居るならばそれは些か根據薄弱になつてくるであらう。要するに西藏語の漢字音寫を還元する事は我々が普通考へる程には簡單には行かないのであつて原典相互に表音漢字の差違がある時は尙更なことである。さて、王詔の熙河路の經營を全體的に眺めるならば、軍事的重要性の爲に經濟的損害を無視して行はれたが如く見える反面その維持には經濟的な建設運動がかなり熱心に行はれて居る。王安石の政策と云ふものは今日色々な意味で注目

されて居るが本論文に於てはこの兩者の關係をもつと詳細に説明して欲しかつた。例へば茶馬法、鹽法等の方面より眺むるもこの王詔の經營は單なる邊境經營ではない筈であるし、第一當時の西方との交通の大道等も唐代とは全く異つて居て、王詔の經營も此の事を充分に考へて居る筈である。彼の經營は單なる西夏吐蕃二族の接觸點を經營して兩族を分離せしめると云ふ事ばかりではなく、かなり發展性のある彈力に富んだ複雑な計畫を持つて居たものであらう。たとひ彼がさう云ふ考へを持つて居なかつたとしても一國の政治の中樞に居る王安石は必ず次の瞬間の計畫を考慮して居たに相違ない。安石が王詔をして自由に活動せしめたのも安石の廣大な識見が然らしめた必然のものと考へたいのである。此の意味に於て佐伯氏の研究の速かなる發表は切に望まれるものである。

「元朝に於ける投下の意義」(村上正二)蒙古帝國時代掠奪によつて流入された浮虜人口の聚樂が漠北の各地に發生して夫々その所有者たる遊牧領主の經濟的基礎を提供し、政治的地盤と云ふものが出來て、諸王功臣に與へられたものは即ち投下軍州と呼ばれる事になつた。所が國家が內的にも成長し漸く農耕社會の存在をも理解するやうになると今度は南方支那の州縣に對しても又投下領主の權能を認める事になり、投下に二種類のもものが生じて語源上からは遠の時代の概念を以てしては理解する事

が出来ない元代特有の投下の内容が示される事になった。即ち支那内地に於ては官僚的封建國家が一度樹立された後なので、結局蒙古人の支配下に落ちたとは云へ元朝の國家は官僚的封建制を認めざるを得ず、遊牧的封建制と農耕的封建制と此の二つの異つたものの上に投下權が成立するのである。元朝に於ては遊牧封建制のもとに、領邑即ち本投下はメトツクを媒體として領主の部曲を構成し、純粹な封建集團に化して行き、農耕地帯のそれは前者の維持又は補足的な經濟地盤として發達した。このやうな變質の過程に投下の意義の變化は生じ、特に本投下を指す場合は愛馬なる稱呼が用ひられるやうになる。つまり投下より愛馬なる移行の道程は民族的千戸制度が封建的愛馬制度に發展した事を示して居るのである。以上は論文の大要であるが投下に就いては此まで安部小林兩氏の論考が若干あり、安部氏は投下の語源を犀利なる觀察眼を以て徹底的に究明し、小林氏又小論乍ら重要史料に着目して其の研究は漸次進展しつゝあつた。今村上氏の此の論文は其等を綜合して着實な方法と慎重なる考察を以て蒙古社會の根本的問題たる投下の全貌を浮き上がらせたものである。氏は手許にある貧弱な史料によつて敢て臆測をめぐらしたと謙遜して居られるが、今後の蒙古研究に此の論文が與へる示唆は大きなものがあるであらう。本學報第一の力作として敬意を表する次第である。

本號には此の他「拔都終焉の年次に就いて」(岩村忍)、「外蒙古内西遊記の考證」(クレメンツ、橋磨橘吉譯)の二つ及び Harlan, Central Asia. Mc Govern, The Early Empire of Central Asia の紹介がある。Mc Govern の著に就いては「ミタカ」に現在翻譯連載されつゝある事を付記しよう。概観すれば本號は元の研究が壓倒的に多い。而して宗教關係のものが一つもない。蒙古は地域的にも歴史的にも廣大である。今後は種種なる方面からの検討が内容に盛られる事であらう。自然科學方面の研究も考慮されて居ると聞く。將來の發展を望んでやまぬ次第である。

〔佐藤長〕

(四十二頁より續く)

今の中央及び西部西藏を指すものなる事は Breischneider (Mediaeval Researches from Eastern Asiatic Sources, London, 1910. II, P. 221) 等が既に述べた所であるが、朶甘は何に當るであらうか。朶甘烏斯藏で吐蕃を意味し、明史兵志等では西蕃の條に最高の軍司令部として烏斯藏都指揮使司と共に朶甘都指揮使司が置かれた事を云つて居るのを見れば朶甘は東部西藏を指したものであらうとの想像は直に起つて来る。おそろく朶甘は mDo で今日の青海から Amdo 地方へかけた所、甘は Khams で sDe-dge より Ba-tan にかけた地方即ち現在西康省(此の康は明かに Khams から來て居る)となつてゐる方面を指したものであらう。つまり朶甘は烏斯藏と同じく mDo-Khams なる合成語と考へられる。mDo, Khams, dBus, gTsan. は相共に並んで西藏史料にもよく出て來る地方名である。(佐藤)